

中高生はなぜ“幸福”なのか

～「中学生・高校生の生活と意識調査 2012」から③～

世論調査部 村田ひろ子 / 政木みき

3回にわたる「中学生・高校生の生活と意識調査2012」報告の最終回では、中高生の心理状態や将来像、価値観について考察する。

9割を超える中高生が『幸せだ』と感じていて、中でも「とても幸せだ」がこの10年で大幅に増えた。その背景には不安定な心理状態が「まったくない」人や打ちこめるものがある人の増加が考えられる。

また、多くの中高生が社会のことより自分の生活に関心があり、今の生活を充実させることを重視している。学校や家庭生活に対する評価は高く、それがそのまま幸福感の高さにつながっているとみられる。将来の夢は公務員や教師など安定して堅実な職業が上位に並び、夫婦で働き、子育ても分担すべきと現実的かつ合理的に考える中高生が少なくない。

日本の社会や将来については、親と同様、多くの中高生が否定的である。しかし中高生に限っていえば、肯定的に評価する人がこの10年で増加していて、さらに「自分がある程度犠牲にしても、他人の面倒をみる」生き方が望ましいという人も増えた。親が日本社会に希望を見出せないなか、中高生は前向きな価値観をもつ傾向がうかがえる。

はじめに

本稿は2013年1月号から3回にわたり連載してきた「中学生・高校生の生活と意識調査2012」報告の最終回である。1月号では学校生活とインターネット上に広がる友だち関係について、2月号では厳しい社会環境におかれた中高生と親の勉強への意識について報告した。最終回では中高生の心理状態や将来像、価値観について考察したい。

現代の中高生は、右肩上がりの経済成長が終わった成熟期の日本社会で生まれ育った。豊かさやインターネットによって会ったこともない人と友だちになれる便利さを手に入れる一方、社会には少子高齢化や就職難など将来を不安にさせるような問題が待ち受けている。こうした時代に思春期を過ごす中高生は社会をどう見つめ、どんな価値観や夢をもっているのだろうか。本稿では'82年以降に行われた5回の調査と父

母調査のデータから現代の中高生の意識の特徴を探っていききたい。

調査の概要は文末に記した¹⁾。単純集計結果とサンプル構成は、生徒調査は1月号に、父母調査は2月号にそれぞれ掲載している。

1. 幸福感

『幸せだ』が9割超、

中でも「とても幸せだ」が大幅増

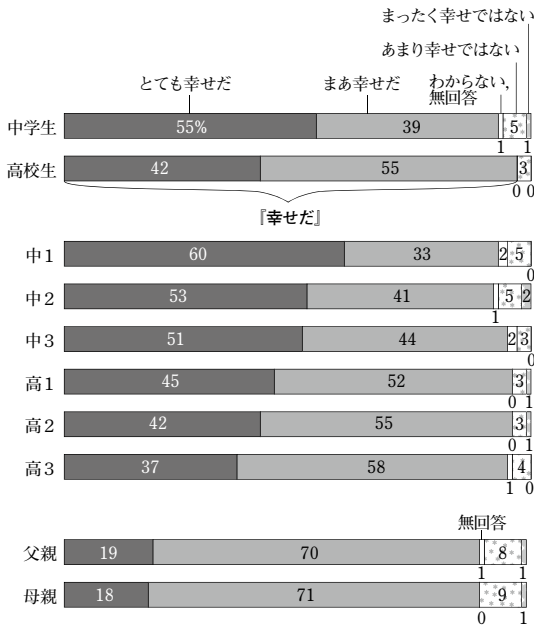
はじめに幸福感についてみていく。「今、幸せと思うか」たずねた結果(図1)、中学生では「とても幸せだ」、高校生では「まあ幸せだ」がそれぞれ55%で最も多く、「とても」と「まあ」を合わせた『幸せだ』は中学生で94%、高校生で96%に上った²⁾。

学年別にみると、「とても幸せだ」は中1の60%から高3の37%へと学年が上がるにつれ少なくなるが、いずれの学年でも『幸せだ』が9

割を超えた。

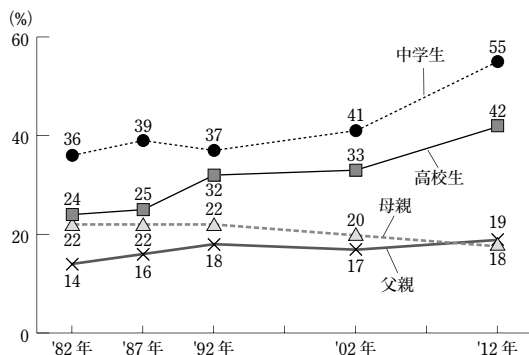
父親と母親に対して同じ質問をした結果でも『幸せだ』がほぼ9割だった。調査方法が違うため単純な比較はできないが、このうち「とても幸せだ」は2割弱にとどまり、中学生とは傾向が異なる。

図1 幸福感〈中高・学年別・父母〉



時系列の推移をみると(図2), '02年からの10年で「とても幸せだ」が中学生で41%から55%, 高校生では33%から42%へと顕著に増

図2 幸福感(「とても幸せだ」)〈中高・父母〉



えた。横ばいの父母とは異なる動きをしている。

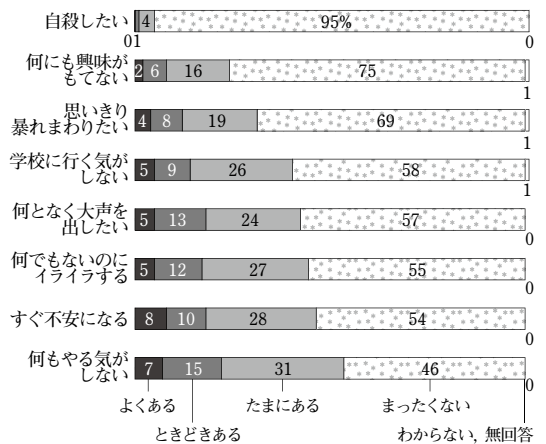
中高生の幸福感はなぜ高まっているのだろうか。2章と3章では幸福感の背景にあると考えられるところの状態のほか、理想とする生き方や社会への関心についてみていきたい。

2. こころの状態

(1) 不安定な心理状態「まったくない」が増加

8つの不安定な心理状態を挙げ、感じる頻度をたずねた結果(図3), 「よくある」と「ときどきある」という回答はいずれの項目でも少なく、「何もやる気がしない」を除くすべてで「まったくない」が半数を超えた。

図3 病理現象(「まったくない」が多い順)〈全体〉



時系列変化をみると(表1), 荒れる学校が社会問題となっていた'82年の調査と比べ、「まったくない」の割合はすべての項目で増えている。特に「思いきり暴れまわりたい」が「まったくない」は19%から69%, 「何となく大声を出したい」が「まったくない」は31%から57%と増加が著しい。'02年調査で指摘して³⁾以降も中高生の“ストレス”の減少は進んでいるようにみえる。

表1 病理現象〈全体〉
 (「まったくない」, '12年で多い順)

(%)	'82	'87	'92	'02	'12
自殺したい	85	88	92	92	< 95
何にも興味もてない	61	61	62	70	< 75
思いきり暴れまわりたい	19	37	35	54	< 69
学校に行く気がしない	53	49	51	52	< 58
何となく大声を出したい	31	43	42	48	< 57
何でもないのでイライラする	39	36	35	46	< 55
すぐ不安になる	35	38	39	47	< 54
何もやる気がしない	35	32	35	43	46

※表中の不等号は、'02年と'12年を比較した検定結果(信頼度95%)

一方で、情報環境の変化が若者に新たなストレスをもたらしているとの指摘もある。たとえば中西(2009)⁴⁾は、メールで友だち関係を維持する若者は、送られてきたメールに即座に返信する「即レス」や文章の印象を良くするための絵文字といったきめ細かい配慮を常に求められる大変さを抱えていると分析する。1月号でふれたように、インターネットという新たなツールを使った人間関係において“ネットいじめ”を経験したり、「メールの返信や、書き込みをするのが面倒だ」と感じたりする中高生もいた。社会の変化にともない、従来の質問ではとらえきれないストレスが生じていることには留意しておきたい。

(2) 打ちこめることのない中高生

過去30年で最も少なく

「今、打ちこんでやれること」を自由回答でたずねた結果、中高全体では「スポーツ」(36%)が他を引き離して多く、「音楽」(12%)、「勉強」(9%)が続いた。打ちこめるものを「もっていない」中高生は'87年以降減少傾向にあり(図4)、『12年は25%と過去30年で最も少なかった。

打ちこめるものの有無で分けて幸福感をみると(図5)、「とても幸せだ」は打ちこめるものがある人では52%と「ない」人の39%を上回る。

図4 打ちこめるものを「もっていない」〈全体〉

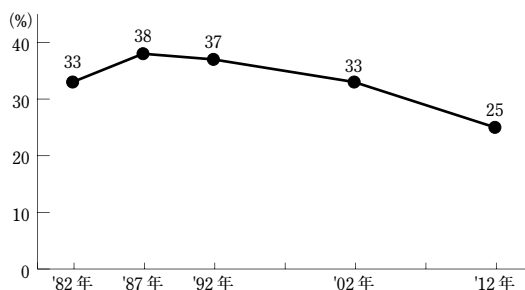
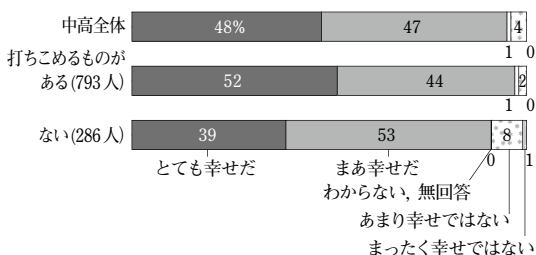


図5 幸福感〈打ちこめるものの有無別〉



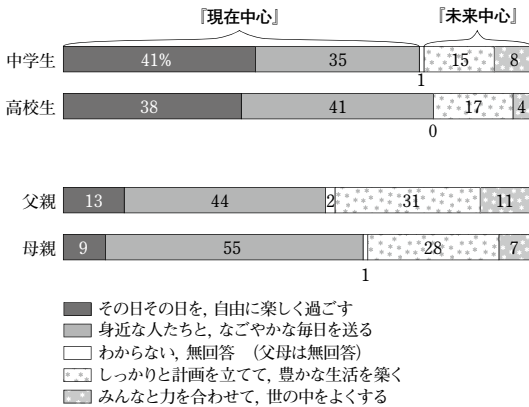
3. 理想の生き方と社会への関心

(1) 「今」を重視する中高生

中高生が望ましいと思う生き方を、「その日その日を、自由に楽しく過ごす」「身近な人たちと、なごやかな毎を送る」「しっかりと計画を立てて、豊かな生活を築く」「みんなと力を合わせて、世の中をよくする」の4つの選択肢から選んでもらった(図6)。「自由に楽しく」と「なごやかな毎日」は、今の生活を重視する『現在中心』の考え方、「しっかりと計画」と「世の中をよくする」は将来の結果に重きをおく『未来中心』の考え方とされる。

中高生では、「自由に楽しく」と「なごやかな毎日」がともに多く、それらを合わせた『現在中心』の考え方は8割近くと圧倒的多数を占めた。中高生が今の生活を重視する傾向はこの30年一貫している。

図6 生活目標〈中高別・父母〉



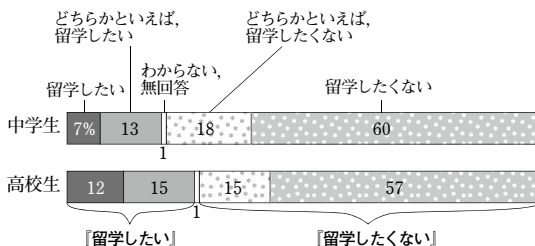
一方、父母調査で最も多かったのは、ともに「なごやかな毎日」で、この30年で大幅に増えた。「自由に楽しく」は少数であり中高生とは傾向が異なるが、これらを合わせた『現在中心』は父母のどちらも6割前後で『未来中心』を上回った。

この生活目標についての質問は、NHKが16歳以上の国民を対象に5年に1度実施している「日本人の意識」調査から採用している。この調査から国民全体の傾向をみても、『現在中心』の人は増加傾向にあり、『未来中心』の人を大きく上回っている⁵⁾。

(2) 7割超が『留学したくない』

海外へ留学する日本人の減少⁶⁾などから若者の「内向き」志向が指摘されている。今回の調査で外国への留学希望をたずねる質問を新た

図7 留学希望〈中高別〉



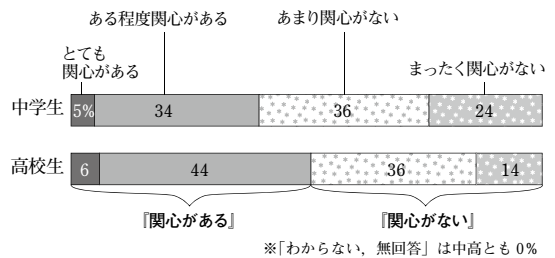
に設けた結果(図7), 中高とも「留学したくない」が半数を超えた。「どちらかといえば」を合わせると『留学したくない』は中学生で78%, 高校生で72%と多くが留学に消極的である。

(3) 高くはない政治や世の中への関心

政治への関心をたずねた結果(図8), 中学生では『関心がない(あまり+まったく)』が60%と多数を占め、高校生でも半数は『関心がない』と答えた。

1月号でも紹介したが、複数回答で「今、関心のあること」をたずねた結果、全体で上位に並んだのは「友だちづきあい」「音楽」「将来のこと」といった身近なことから、いずれも5割前後だった。一方、「世の中の動き」は17%にとどまった。中高生の外の世界に対する関心は高いとはいえない。

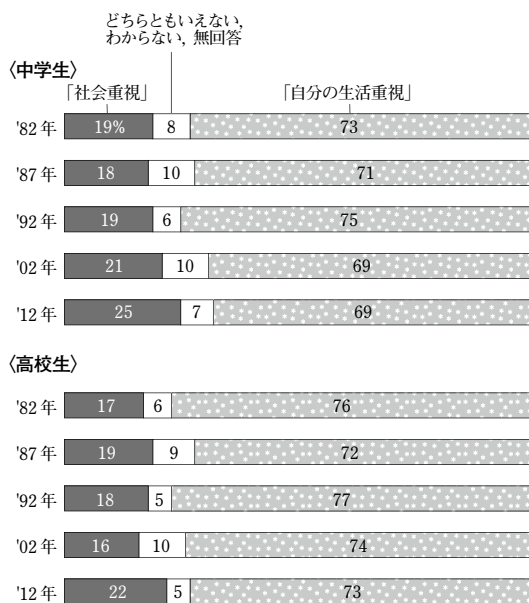
図8 政治に対する関心〈中高別〉



(4) 7割が「社会」よりも「自分の生活」

望ましい生き方について、「自分の生活のことよりも、まず社会のことを考える」生き方(「社会重視」と「社会のことを考える前に、まず自分の生活を大切にする」生き方(「自分の生活重視」)のどちらがよいかたずねた結果(図9), 中高とも「自分の生活重視」が約7割を占めた。この10年で高校生では「社会重視」が16%から22%と有意に増えたが、「自分の生活重視」が圧倒的多数であることに変化はない。

図9 望ましい生き方(社会か自分の生活か)〈中高別〉



橋元 (2011)⁷⁾は自らの研究室で行った調査で「世間のできごとより、自分の身の回りのできごとに興味がある」と答えた10代、20代の割合が他の年層に比べ突出して多かったという結果を示し、若者の関心の範囲は自分とその周辺に限られていると指摘しているが、今回の調査でも同様の傾向がみられた。

以上、中高生の心理状態と価値観をみてきた。若年層の幸福度や生活満足度が高いことはさまざまな調査結果⁸⁾にも表れている。これについて古市 (2011)⁹⁾は、「今の若者は素朴に『今日よりも明日がよくなる』とは信じていることができない」という。そして、身近な幸せのほう的大事だと考えているため、「今が幸せだと言うことができる」と分析している。'12年調査の結果からは、心理状態が安定し政治や社会にあまり関心がない今の中高生は、身近な学校や家庭生活への評価が高くなり、その結果“幸せ”と感じていると考えられる。

4. 将来展望

(1) 将来について

「決めていない」中高生が減少

中高生は、自分自身の将来をどのように見ているのだろうか。将来就きたい職業について、自由回答の結果を分類し表2にまとめた。回答は多岐にわたるが、中学生では「スポーツ選手」が8%で最も多く、次いで「保育士」「教師」などとなっている。高校生では「保育士」「教師」「専門職」「福祉・医療関係」が上位に並んでいる。'02年と比べて大きな変化はないものの、中学生では「調理師」「福祉・医療関係」、高校生では「公務員」が増加し、'02年調査で指摘した「手に職」¹⁰⁾や安定志向が引き続きみられる。

今回特徴的なのは、将来就きたい職業を「決めていない」という中学生が前回の29%から12%、高校生が27%から11%と、ともに大きく減っていることだ。

親に対しても「子どもに将来何になってもらいたいか」をたずねた。父親では「公務員」16%と「子どもにまかせる」15%が他を引き離して多くなっている。母親についても「子ども

表2 将来就きたい職業 (自由回答、'12年の中学生で回答の多い順)〈中高別〉

	中学生		高校生	
	'02年	'12年	'02年	'12年
スポーツ選手	8%	8%	1%	1%
保育士	4	3	4	5
教師	3	3	4	5
公務員	1	3	2	4
専門職	3	3	3	5
調理師	1	< 3	1	2
獣医および動物関係	3	3	2	1
福祉・医療関係	1	< 3	5	5
看護師	3	3	4	4
決めていない	29	> 12	27	> 11

※ 表中の不等号は、'02年と'12年を比較した検定結果 (信頼度95%)

にまかせる」が20%で最も多く、次いで「公務員」15%となっている。

将来の就職難を心配する父母が9割に上ることを2月号で紹介したが、非正規雇用やリストラの増加による雇用不安を背景に、高校生の中で「一生続けられる仕事を早く見つけるべき、という定職志向が強まっている」という研究報告¹¹⁾もある。

今回「決めていない」という中高生が減ったのも、できるだけ早く、めざす職業を決めておきたいという意識のあらわれかもしれない。自分の生活や身近な幸せを大切にしている中高生は、「今」を重視しながらも、現実的な将来像を思い描き、いち早く進路を見極めている。

(2) 男女の役割分担は「家庭内協力」を重視 多くが出産後の女性の就労に肯定的

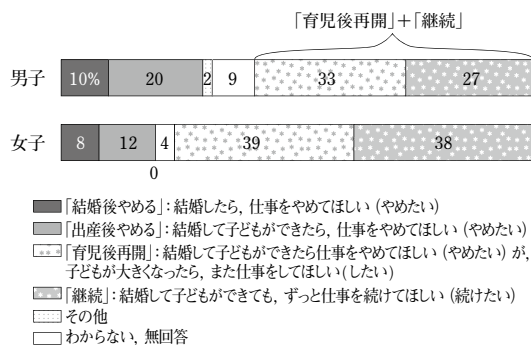
女性の社会進出や出生率の低下などに伴い、男女の家庭での役割分担への関心がますます高まっていることをふまえ、今回の調査では女性の就労や将来の子育てに関する質問を新たに設けた。

結婚や出産後の女性の就労について、男子には「将来結婚したら、結婚相手に仕事を続けてほしいか」、女子には「将来結婚したら、仕事を続けたいか」をたずね、**図10**の4つの選択肢から選んでもらった。

男子では「結婚して子どもができれば仕事をやめてほしいが、子どもが大きくなったら、また仕事をしてほしい」（「育児後再開」）が33%と最も多く、次いで「結婚して子どもができて、ずっと仕事を続けてほしい」（「継続」）が27%だった。女子では「育児後再開」（39%）と「継続」（38%）が同程度である。

「育児後再開」と「継続」を合わせた割合は、

図10 結婚、出産後の女性の就労（男女別）



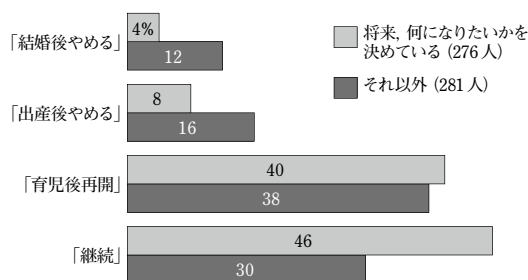
男子で60%、女子で76%となっていて、男女ともに出産後の女性の就労に肯定的である。

結婚や出産によって働き方が左右されやすい女子では、どのようなことが就労意欲に影響を与えているのだろうか。

母親の就労状況別にみると、フルタイム勤務の場合（217人）は「継続」が47%で最も多いのに対し、母親が主婦（249人）だと、「育児後再開」が44%で最も多い。

将来の夢と就労意欲も関連がみられる。将来の計画等について複数回答でたずねたところ「将来、何になりたいかを決めている」を挙げた女子は50%だった。このうち仕事を「継続」したいというのは46%で、「それ以外」の30%より多い（**図11**）。自分のやりたいことを具体的に決めている女子には、将来働き続けることに意

図11 結婚、出産後の女性の就労
（女子・何になりたいかを決めているかどうか別）



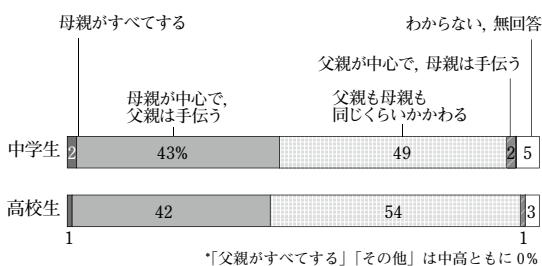
欲的な人が多い。

労働力人口の減少に伴い、女性の潜在的労働力に関心が寄せられているが、多くの中高生が出産後の女性の就労に肯定的である。この先もこうした考え方が損なわれることのないよう、キャリア教育のさらなる充実や、仕事と家庭を両立できる環境の整備がますます重要になってくるだろう。

将来の子育ては、「父母が同じくらいかかわる」が最多

では、子育て分担についてはどのように考えているのだろうか。「将来結婚して子どもが生まれたら、子育ての分担はどのようにしたいと思うか」をたずね、図12に示した4つの選択肢から1つ選んでもらった。その結果、「父親も母親も同じくらいかかわる」が中学生で49%、高校生で54%と、ともに最も多かった。

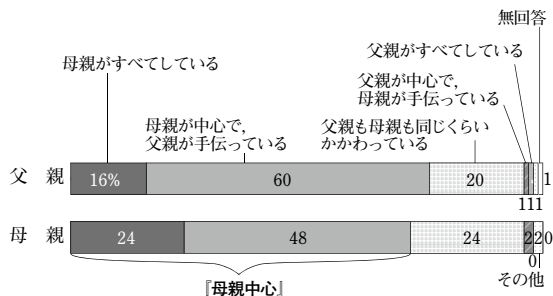
図12 将来の子育て分担〈中高別〉



父母に対しても、家庭での子育ての分担についてたずねている。ともに「母親が中心で、父親が手伝っている」が最も多く、父親で60%、母親で48%である(図13)。「母親がすべてしている」という人を合わせると、『母親中心』の子育てを行っているとは回答したのは、父親で76%、母親で72%に上る。

「父親も母親も同じくらいかかわる」と回答している中高生は半数程度いるが、「同じくら

図13 夫婦の子育て分担〈父母〉



いかかかわっている」という親は2割程度にとどまっています。親の実態は子どもが思い描いている将来の家庭像とは隔たりがある。

子育てを主に母親が担っている家庭が多い背景の1つとして、中高生の父親世代にあたる男性40代・50代の平日の仕事時間が増え、在宅時間が減っている¹²⁾ことが挙げられる。仕事が忙しく、父親が子育てにかかわるのが物理的に難しい実態があるのだろう。

前述の「日本人の意識」調査によれば、理想の家庭として「父親は仕事、母親は家庭」という「性役割分担」を選ぶ人が減る一方、「父親は家庭を気づかい、母親も暖かい家庭づくりに専念」《家庭内協力》が増えている¹³⁾。《家庭内協力》を選ぶ人は若い世代ほど多い。「夫は外で働き、妻は家庭を守る」という考え方を肯定する若者の増加を示唆する調査¹⁴⁾もあるが、夫婦で協力すべきという意識は若い人々を中心に浸透しつつあると言えるのではないかと。

「男だから」「女だから」と気負うことなく、男女で協力して家計を支え、子育てを分担するという考え方は、雇用情勢が厳しさを増し夫の稼ぎだけで家族を養うのが難しくなった今の日本で、極めて現実的という見方もできる。こうした合理的とも言うべき中高生の価値観は、低成長時代の新しい男女の役割分担意識を象徴しているのかもしれない。

5. '12年調査でみえた兆し

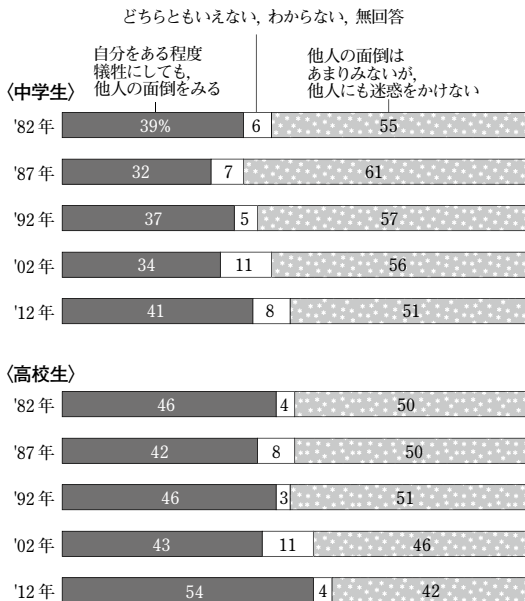
最後に'12年調査でみえた新たな傾向をみていきたい。

(1) 「自分がある程度犠牲にしても、他人の面倒をみる」が増加

1つ目は個人主義的な考え方の変化である。「自分がある程度犠牲にしても、他人の面倒をみる」生き方と「他人の面倒はあまりみないが、他人にも迷惑をかけない」という生き方のどちらが望ましいかを10年前と比べると(図14)、「他人の面倒をみる」が中学生で34%から41%、高校生では43%から54%へと増えた。高校生では過去30年で初めて「他人の面倒をみる」のほうが多くなった。

3章(4)で述べたように「自分の生活」と「社会」のどちらを重視するかたずねた質問では、多数が自分の生活を重視する傾向に過去30年変化がなかった。しかし「自分」と「他人」とい

図14 望ましい生き方(他人の面倒をみるか)〈中高別〉



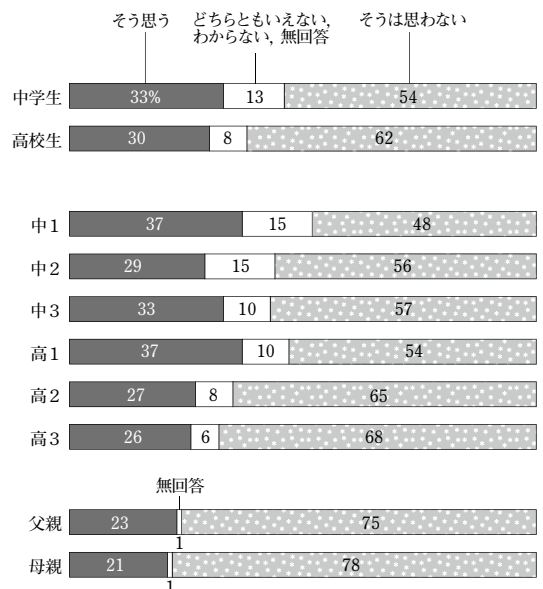
う関係で考えた場合は、多少の自己犠牲がともなっても他人の面倒をみるべきという中学生が増えた。

'12年調査は、2011年3月の東日本大震災後初めてのものだった。震災後の総務省の調査¹⁵⁾では、1年間にボランティア活動を行った人の割合が20代から50代では5年前と比べて増えていたのに対し、中高生世代の10代では減るなど、具体的な行動には結びついていないのかもしれない。しかし、「自分がある程度犠牲にしても、他人の面倒をみる」生き方を支持する中高生が増加した背景には人との絆や助け合いの大切さが強調された震災後の社会のムードがあった可能性が考えられる。

(2) 日本は「よい社会」、将来は明るいと思う中高生が増加

日本社会に対する評価にも変化があった。「今の日本はよい社会だ」という意見に対しては、中学生の54%、高校生の62%が「そうは思わない」

図15 今の日本はよい社会か〈中高・学年別・父母〉

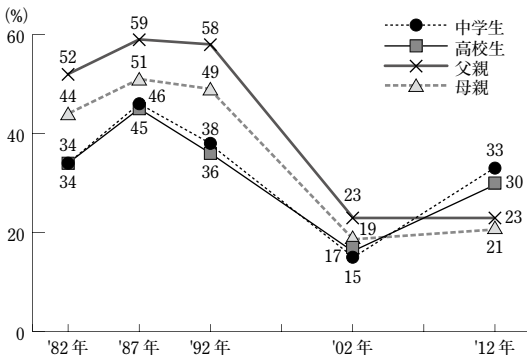


と答えている。学年別にみると「そうは思わない」は高3で最も多く、68%に上った(図15)。

父母でも「そうは思わない」が多数を占め、親も中高生も多数が日本社会に否定的である。

ただ10年前と比べると、中高生では「日本はよい社会」と考える人が増えていた。時系列の推移をみると(図16)、日本はよい社会と考える人の割合は中高生も父母もバブル経済崩壊後の'92年から'02年にかけて一気に減少するまで同じような動きをしていた。しかしこの10年で父母は変化がなかったのに対し、中学生は15%から33%、高校生では17%から30%へと大幅に増加し、過去30年で初めて中高生と父母が違う動きをした。

図16 「今の日本はよい社会だ」に「そう思う」(中高・父母)



日本の将来展望に対する評価についても、中高生と父母で異なる傾向がみられる。

「日本の将来は明るい」という意見に対し12年の結果で(図17)、「そうは思わない」という中高生が多数だった。その割合は学年が上がるほど高くなり、高2と高3では7割を超えた。また父母でも「そうは思わない」が9割と圧倒的多数を占め、親子とも日本の将来を悲観的に考えていた。

ところがこの10年でみると(図18)、中高生では「日本の将来は明るい」と思う人が増加し、横

図17 日本の将来は明るいか(中高・学年別・父母)

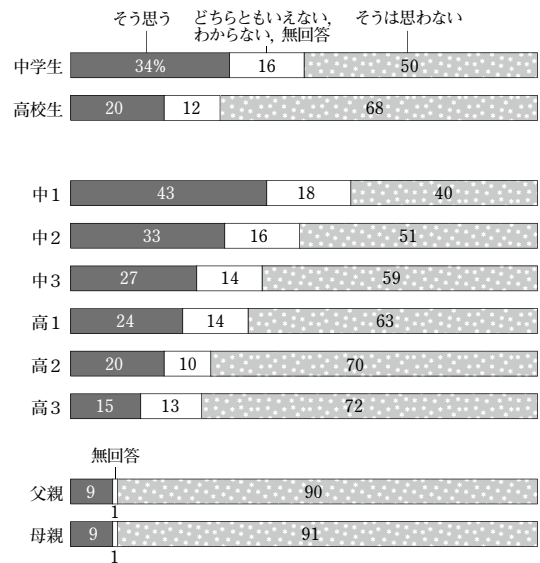
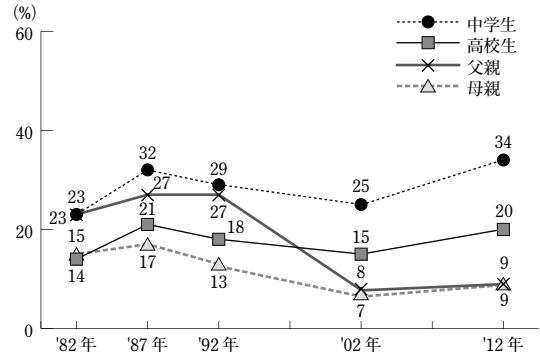


図18 「日本の将来は明るい」に「そう思う」(中高・父母)



ばいの父母とは異なる動きをしている。日本経済の低迷が続き、東日本大震災が社会を揺るがしたこの間、多くの親が社会や将来への希望を見出せずにいたにもかかわらず、日本社会を前向きに評価する中高生は増えていたのである。

おわりに

以上、3回にわたって中高生調査の結果をみてきた。今の中高生は、インターネット上に友だちを広げ、親や先生ともよい関係を築き、学校や家庭生活に対する評価が過去最も高かつ

た。人生で大切なことは身近な人と今の生活を楽しむことであり、政治や社会にはあまり関心がない——そんな中高生たちは調査結果のとりとても“幸せ”にみえる。

ただ、親の9割が国の将来を悲観する閉塞した社会の空気を中高生も感じているはずだ。学年が上がるほど日本社会に否定的になる結果からもそれはうかがえる。だからこそ将来を憂える親の思いを汲んで、勉強に前向きに取り組み、現実的な進路を選ぶ傾向が表れているのであろう。

一方、中高生が親の価値観に影響を受けているだけではないことが、'12年の調査結果から新たにわかった。大人にとっては“失われた”ままだったこの10年。日本社会や将来を前向きに評価する中高生が増えていたという調査結果から、将来に希望を見出すこともできるのではないだろうか。

大人になる一歩手前の中高生は、社会への関心がまだ乏しく、その社会観は未熟かもしれないが、低成長時代の日本しか知らない彼らに芽生えた変化が、今後国民全体の意識にどうあらわれてくるのか注視していきたい。

(むらた ひろこ/まさき みき)
執筆：1～3, 5政木, 4村田

注：

- 1) ページ下の「調査の概要」参照。
'02年までの詳細なデータは、『放送研究と調査』の調査報告とNHK放送文化研究所編『NHK中学生・高校生の生活と意識調査 楽しい今と不確かな未来』（NHK出版、2003年）を参照。
- 2) 回答結果をたし上げる場合には実数でたして%を計算しているの、%をたし上げたものとは一致しないことがある（以下同）。
- 3) 山内利香「社会よりも自分、未来よりも今が大事」～「中学生・高校生の生活と意識」調査から③～『放送研究と調査』2003年2月号
- 4) 中西新太郎『〈生きづらさ〉の時代の保育哲学』（ひとなる書房、2009年）
- 5) 詳細なデータは、NHK放送文化研究所編『現代日本人の意識構造 [第七版]』（NHK出版、2010年）を参照。
- 6) 2012年1月文部科学省集計の「日本人の海外留学状況」によれば、日本から海外への留学者数は'04年の約8万3,000人をピークに減り続け、'09年は6万人を下回った。
- 7) 橋元良明『メディアと日本人—変わりゆく日常』岩波新書（2011年）
- 8) たとえば2012年内閣府「国民生活に関する世論調査」の、現在の生活に対する満足度では20代は『満足』（「満足している」+「まあ満足している」）の割合が75%と70歳以上とともに高い。
- 9) 古市憲寿『絶望の国の幸福な若者たち』（講談社、2011年）
- 10) 中瀬剛丸/山内利香「中高生はなぜ勉強しなくなったのか」～「中学生・高校生の生活と意識」調査から①～『放送研究と調査』2002年12月号
- 11) 菅澤貴之「地位達成志向の変容」友枝敏雄編『現代の高校生は何を考えているか—意識調査の計量分析をとおして—』（世界思想社、2009年）
- 12) NHK放送文化研究所編『日本人の生活時間・2010—NHK国民生活時間調査』（NHK出版、2011年）
- 13) 5)に同じ。
- 14) 2012年の内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査」
- 15) 2011年の総務省「社会生活基本調査」。2011年調査は2011年10月に実施された。

調査の概要

調査時期	'82年		'87年		'92年		'02年		'12年	
	生徒	8月28日(土) 29日(日)		8月28日(金)～31日(月)		8月22日(土)～31日(月)		8月23日(金)～9月1日(日)		8月24日(金)～9月2日(日)
調査方法	8月下旬～9月中旬		8月22日(土)～9月21日(月)		個人面接法		個人面接法		配付回収法	
調査対象	生徒		生徒		生徒		生徒		生徒	
調査相手	3,600人(12人×300地点)		1,800人(12人×150地点)		1,800人(12人×150地点)		1,800人(12人×150地点)		1,800人(12人×150地点)	
調査有効数(率)	3,165人(87.9%)		1,556人(86.4%)		1,459人(81.1%)		1,341人(74.5%)		1,142人(63.4%)	
	1,764人		827人		729人		650人		570人	
	1,350人		729人		730人		671人		557人	
	2,629人(86.7%)		1,284人(88.2%)		1,136人(77.9%)		1,209人(67.2%)		969人(53.8%)	
	2,804人(90.7%)		1,379人(90.1%)		1,227人(84.1%)		1,366人(75.9%)		1,230人(68.3%)	

* '87年と'92年の生徒調査では、中学生以外を有効サンプルから除外した。